

## りびんぐらいぶず 平成29(2017)年7月第2号

### 「信益同時」の「益」の構造

#### ご讃題

方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり。

( Ref 『一念多念文意』第十八条』註釈版聖典 P690 ~ 691 )

#### はじめに

平成二十九年七月一日、ご縁を戴いて出講致しました愛知上組讃仰布教大会は、お参りが毎年二十名増え続け、とうとう今年は百九十人に達し、お世話下さるご担当役員様が、会所のお寺を探すのに大変ご苦労になったと承りました。

数百年のお聴聞の歳月が土徳を培ってきた姿がここに 있습니다。

#### 浄土真宗の現状

ところで、先の伝灯奉告法要で賜った「ありのままに ひたむきに」という御書物の中で第二十五代専如御門主は、「親鸞聖人は、『南無阿弥陀仏』と声に出して称えること自体を『自力』と云って否定されたわけではありません」(Ref 同書 p75)と敢えて仰せ下さいました。

これは、三業惑乱(さんごうわくらん)事件以降、宗門では、称えられる名号こそ大行であり、称える称名に意義を認めない(能称無功)という立場が高じて自助努力する姿勢さえも自力として排除する行き過ぎがあることを懸念されたものに他ありません。

この課題は、御門主の諮問機関である勸学寮が自らのお仕事として遅滞なく明確な今日の態度をお示し戴きたいところであります。

ところで、もう一つ、浄土真宗には看過すべからざる大きな懸念材料があります。それは、「浄土真宗には伝道がない、伝道教学がない」と云われることがあることであります。

その背景には、どうやら浄土真宗とは如来の本願(力)だからというのがあるようです。だから、私達は何かをしてはならない。それは、如来様の本願を疑いその働きを邪魔することになるからだというのであります。

こういう発想は、神の福音を伝えることを教学体系の中に組み込んでいるキリスト教や論議力を開発して伝道せんとするチベット仏教と相対比すると浄土真宗は何というお目出たいなまくらな宗旨ではないかと思わずにはおれません。

外部社会、仮に、カトリックからみた場合、何という与(くみ)しやすいおめでたい宗旨で

はなかろうかという姿が浄土真宗のご宗旨としての実状ではなかろうかと想われるのです。

浄土真宗は如来の本願力だからその邪魔をしてはならないと頂戴してこられた方々の前で、お念仏をお勧めするお話をしますと、内心随分抵抗感を伴って受け止められることからそのことが伺われます。

お念仏を称えること自体が自力云々以前の状況がここにあるのではないのでしょうか。

実は、お念仏をお勧めすること自体は、「六字釈」は「発願回向釈」のお心なのに、是は一体どうしたことであろうかと訝らざるを得ません。

浄土真宗の特徴である「本願力回向」は、「六字釈」の「帰命釈」にあったのですから、「発願回向釈」を含めて宗祖の「六字釈」は、絶対的に外してはならない押さえどころだったからです。

お念仏をお勧めすることの本質は阿弥陀如来がここにいらっしゃることをお知らせに与る方便法身の働きそのものだったのですから、それをはばかりる必要は全くなかったからです。

親鸞聖人は「方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿弥陀仏なり」と仰せでありました（Ref『一念多念文意』『第十八条』註釈版聖典 P690～691）。

#### ありがたいと頂戴することからの出発

そのようなさなか、〇和上から、昔のお同行は「ありがたい」「ありがたい」といっておみのりを聞いて行かれた。

お法りをお伝えするには、自らも慶びの中にあって、その実感をたよりにお伝えする仕方があるのではないかというご指摘でありました。

信心獲得はただちに素朴な慶びの姿を伴い、その実感がさらなるお聴聞のエンジンとなるからに他ありません。

このようなプロセスが成り立つ上には、「信益同時」の衆生の「信」そのものは「疑う心がない」という相（すがた）のみで表され、信心獲得のその瞬間、浄土往生の因が掛け目無く備わるとは、如来様から賜る本願力回向だからにほかないと論理的に申すことはできても、「如来様のまことのお心」の構造そのものは、如来さまのお手許で成就され存在するものにほかありませんから、衆生は「利益」の実感をあまねく実質的に味わうことができているとは云えないことです。

むしろ、衆生は、二河白道を辿る信心の道の途上にあって、少しずつ少しずつ如来広大難思の慶心をご利益として実感として味わっていくのだというのが自然です。

このように思い至ることができたのは、妙好人浅原才市さんの

なむあみだぶの居り場が知れた。  
どをして知れた。  
わしの心に、みちみちて、  
なむあみだぶの声で知られた。  
ごをんうれしや。  
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ

(Ref 鈴木大拙編著『妙好人浅原才市集』p15)

という素朴な詩に接し、正像末和讃第二十五番のご和讃に接したからに他ありません。

才市さんは「なむあみだぶの声で知られた」と仰せ下さっています。声で知られたと仰せになる以上は、声に出してお念仏をお称えになり、聞こえて下さる南無阿弥陀仏が如来様直々の勅命と受け止めていらっしゃったお姿が伺われるのであります。

二河白道で「我能く汝を護らん」と阿弥陀様が仰せ下さる「護」のお言葉こそは、摂め取って決して捨てない如来様の強い強い本願のおこころを指しています。

摂取不捨のご利益は、今生でのご利益を申しますが、その中味は現生十種の益に開いてお示し下さっています。そのうち「慶び」そのものは「七つには、心多歡喜の益」が的証しているかと窺われます。

こうして、衆生は二河白道を辿りつつ、本願成就文は「乃至一念」の「乃至」で信心の改まる都度、実感を伴って「なんとありがたいことよのう」と頂戴するのではないかと窺われます。「心多歡喜」は「摂取不捨」の御文に内包されていたからです。

二河白道の「汝一心正念直来我能護汝」の「一心」とは何か、信心であります。その深みの獲得は要件とはされず、「左様か」と頭を垂れることだけが求められます。「直ちに來たれ」からそのことが首肯できます。

「正念」とは何か、お念仏であります。親鸞聖人ご自身は、「ご本願であり、第一希有の行であり、金剛不壞の心なり」とも仰せですから、ご本願にお任せして、「左様か」と頭を垂れてお念仏すれば、如来様のお喚び声が聞こえて下さる。既に「左様か」と心の扉は開かれていたのですから、如来様のまことのお心、金剛心は既に私の胸底深くお宿り下さっていたのであります。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会七月二日(日)十九時

仏教婦人会例会 七月十六日(日)十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥